

子どもたちの瞳の輝きに魅せられて

～ネパール教育視察団の試み～

日本工業教育経営研究会海外交流特別委員会

1. はじめに

工業技術教育に関する研究の振興と実践的工業技術者の育成を目指す本会に、教職員にこそ広い視野を備えよとの願いが込められた海外交流特別委員会がある。

1998年夏に、ドイツの家具工房やジーマス工場、ミュヘン工科大学を訪ねマイスターの実際を見較べる貴重な機会を得た。フランスとドイツの教育委員会の空気感の違いや、カールスルーエ工科大学のインターンシップ制度は示唆に富み、後々、教育改革の流れを理解するのに大変役立った。チューリッヒのペスタロッツ記念館では、粗末な部屋の壁に手を当てて教育の営みがどれほど大切であるのか心魂に刻んだ一時が忘れられない。

この他にも、世界的なブランドを確立しているイタリアや産業革命を経たイギリスの教育視察など、時宜を得た活動を展開しているが、本報告では20年近くに渡る教育支援を続けてきたネパールでの活動について、各年度の報告から抜粋して取り上げてみたい。

2. ネパール教育視察のはじまり

神秘の国とも言われたネパールに第1回(1992.12)の軌跡を残した26名は、カトマンズ内のパタン市にあるクンプスワ技術学校や、国立トリビュバン大学工学部、家具工場などを見学した。50年以上も前の日本に立ち戻ったかのような街や村に技術教育の差異を上げるまでもなかったが、異口同音に子どもたちの瞳に惹かれたことが報告に記されている。



「将来の夢は？」の問いに元気な返事が戻ってくる

団長の小林一也先生(拓殖大学名誉教授)は「18年前、縁あってネパールに遊び、ネパールの子供たちの学びの悪条件の中で、その人間らしい愛の本能(人間的自然)に向かう目の輝きに出会い、その瞳の美しさに驚いた。日本の子供たちは、ネパールの子供たちとは逆に、学びの条件は良いのであるが、愛に向かう目の輝きは誠に弱く、そのネパールと日本の差にびっくりした。そして、『この差は、教育研究の対象になり得る』と思った。」(第18回ネパール教育視察報告)と活動の原点を示されている。

首都カトマンズは、標高約1,300メートルの盆地状の都市である。王制から共和国制への変動で、地方から流入した人口は百万人に膨れあがったともいわれている。地下水の枯渇や環境問題に加え日に何度も停電がある。しかし、朝夕に大雪山の頂き顔を出す光景には、人知を越えた威厳があり、街のいたるところに祀られた神々や寺院に祈りを向ける人々の姿は敬虔で美しい。

2013年の暮れ、カトマンズ盆地の東端に位置するドリケルの山村に、村民が熱望していた



ガネッシュ小調印式 小林先生や堀川先生の顔が見える

高等部の新校舎が完成した。多くの方々に支えられた20年を越える教育支援がようやく実を結んだのである。

3. ガネッシュ小学校

ガネッシュ小学校 (Ganesh Lower Secondary School) は、パンチャカル村で2番目に古く1951年に創立された。校舎は、ドリケルの街道から20分程山道を歩いた小高い丘の上にある。信じがたいほどの高低差を段々畑が連なりヒマラヤの白い峰々が出迎えてくれる。

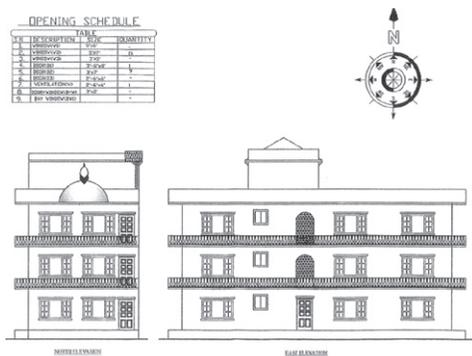
初めて学校を訪問した当時 (94 第3回)、「ネパールでは施設整備に教育予算が付かないためレンガと泥づくりの校舎は1959年の創立以来、修復出来ず、スレート張の屋根だけの仮校舎、机、椅子も不足し土間での勉強、教科書も全員に行き渡らない教育環境の中で眼を爛々と輝かせての授業であった。」(石坂政俊氏)

'95年12月 (第4回, 34名), ガネッシュ小学校再建4ヵ年計画が始まった。そのときの様子を毛利昭先生 (元全国工業校長協会事務局) が

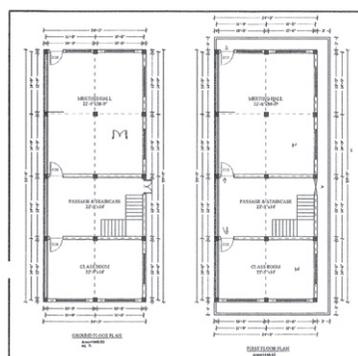


高等部新校舎 珍しい地鎮祭の一コマ

次のように記している。「本会は、日本とネパールの高校生の交流を目指して事業を展開する予定であったが、ネパール国全体の教育力の底上げの必要性を痛感し、カトマンズ郊外パンチャカル村のガネッシュ小学校建設に着手して来た事は周知の通りである。1995年12月に小学校建設に関する調印式が行われ、本格的な支援活動が開始されたのである。晴天の下に行われた調印式に私も参加させて頂いた。当時団長の小林一也拓殖大学教授と堀川忠義委員長 (故人) による調印式は感動と共に今でも鮮明に覚えている。その時、石坂ご夫妻の骨折りで、桜の苗木20本が運び込まれ、学校周辺の敷地に植樹が行われた。」(同第18回報告)。焼成度の低い煉瓦造りの4教室しかない小学校の庭先に小さな椅子が並べられ、たくさん子どもと村人たちが見守る中で執り行われた。続く3年間に2教室ずつ増築を支援した。'99年12月には、「緑と教育と技術」基金 (事務局: 山本将英氏)



高等部新校舎立面図 (当初案)



高等部新校舎1・2階平面図 (当初案)

により新校舎3棟、トイレ、職員室（図書館を含む）、水道設備が完成し、この年に完成式典が盛大に行われた。同時に、中学部が開校して約500名規模の学校となり現在に至っている。

'07年12月、ガネッシュ小学校中学校長より高等部の増設とグラウンドの整備依頼があり、審議の上、子どもたちや親の要望が強い高等部の校舎建設を決定した。'08年12月高等部設置に向けた具体案が示され、群馬県立高崎工業高等学校の中曽根康先生が現場測量を実施した。

ガネッシュ小学校中学校は'09年2月に政府へ高等部設置の申請を行い、同年に新校舎の建設に着手し、約3か年の予定で各方面に支援の依頼を開始した。（第19回報告、石坂敦子氏）

4. 高等部建設を目指して

2009年5月、政府に高等部設置の申請が受理され、校名はShree Ganesh Secondary Schoolとなった。8年生の教室は校舎がないため正門前の民家の1階を借りて授業を行った。'10年度は、9年生用の教室を借り受けなければならず高等部校舎の建築が急がれた。'09年12月、ガネッシュ中学校において、同校教職員やPTA、第17回ネパール教育視察者の立会いのもとで代表委員を決定した。

組織構成は、村開発委員会（Panchkhal Village Development Committee;VDC）代表Rajendra Prasad Sapkota氏、ガネッシュ校代表Shree Ganesh Secondary School校長 Balaram Sapkota氏、日本工業教育経営研究会海外交流特別委員会代表石坂政俊氏、ガネッシュ校支援基金事務長 Ganesh Man Lama 氏であった。

立ち会った後藤信行氏は「この18年間継続して支援しているガネッシュ小中学校を訪問すると、どこで摘んでくるのかいつものように子供たちが花のレイをいくつも首にかけて迎えてくれた。数年前から、後期中等教育（高等学校にあたる）のための9～10年生用校舎建設が計画されてきており、今回の訪問ではその地鎮祭



精一杯の歓迎に心温まる一時

に出席することになっていた。日本と同様、建設予定地で厳かに地鎮祭が執り行われた。1、2年後には立派な校舎が完成しているものと思う。これで子供たちは遠くの学校までバスで通学する必要がなくなる。」と記している。

5. 建設の過程で

高等部校舎は、鉄筋コンクリート4階建て、'12年12月に校舎外装が完成した。内装工事や机、椅子などの調整を行い、'13年12月には学校に引渡すことが出来た。高等部校舎の完成により、高等部の上にさらに2年制のカレッジを設ける予定である。10年生の全国統一卒業試験（SLC）の合格率も高くなり、合格者の高等教育の場が求められている。

しかし、ここまで順調にきたわけではない。建設現場に常駐する監理者を派遣する余裕はなく、ネパール語の「ビスターリ」は「ゆっくり」の意であるが、案の定、工事もビスターリ・ビスターリとなっていた。

「ガネッシュ校高等部校舎の建設は、ようやく階段が取り付けられ建物としての外装が整った。ネパールでは、今、建設ラッシュで資材の高騰、技術者不



右手にヒマラヤを望む建設中の校舎



完成引渡し式を迎えた新校舎の遠景

足で工事がなかなか進まない。ガネッシュ校はドリケルにあり、作業者はカトマンズと学校を往復するために作業時間が1日4時間程度でなかなか進行しない。支援金の多くが人件費で消えてゆく。又、5月を過ぎると雨季となり工事が止まる。平成25年6月までには完成させたいと考えている。しかし、こちらの思い通りにならない現状がある。」(石坂政俊氏)と、難しい場面が記されている。

建築工事にも問題があった。近隣のコンクリート煉瓦造と同様に、柱は細く鉄筋の本数も少ない。狭小の校地のため崖を削って建てたことから構造耐力にも不安が生じ、補強工事が追加され費用負担も増大した。

6. 念願の新校舎が完成

2013年12月28日、前泊していた面々がドリケルに集合し山道を歩んだ。学校に至るこの道を石坂先生やコーディネーターのLAMAさんは何度通ったことであろう。遠くに、ヒマラヤの白き峰々も顔を出し、みんなの足取りも速まり息も弾んだ。ガネッシュ小学校のシンボルだった大きな菩提樹が見えてくると、校庭に張り巡



多少の風雨でも授業ができる新教室



やっとここまでできたぞ！完成引渡し式の賑わい

らされた色とりどりの旗が風にはためき子どもたちの声が響いてきた。

校庭にありっただけの椅子が並べられ、子どもたちに加えて地域の方々もたくさん式典に参集した。神々への感謝の祈りが終わると、歓迎のあいさつ、合唱、ダンスと続く。新校舎は朝日に輝き、山の聖霊の使いと言われる風の神も、「レッサムフィリリ」の歌声に合わせて祝福してくれているようだった。

校名の「ガネッシュ」はヒンズー教の学芸の神の名でもある。物的な支援はこれで一段落だが、指導法の改善や教材不足も課題である。本プロジェクトを支えてくださった皆さんに、ぜひ現地を見ていただき、ガネッシュ校の先生方と一緒にこれからを考えてみたいと思う。

7. おわりに

あるとき定宿にしていたホテルで「アジア研究のような部活動から、ネパールに子どもたちを連れてこれるようになるといいね…」と堀川先生が語ってくれた。'03年、凶らずも「目指せスペシャリスト」の一環で、千葉県立市川工業高校の生徒たちとカトマンズに降り立ち、古都パタンの建築調査など5か年に渡り取り組むことができた。現地に同行した伊藤敏朗先生(現東京情報大学教授)は、天啓を受け現地で映画を制作し数々の大賞に輝いている。何度か訪れた人は、同様に大きな気づきを得たのではないだろうかと思惟する。ネパールに関わった多くの皆様に「ナマステ(あなたの中の尊きものを拝みます)」の言葉と心からの感謝を申し上げます。(文責 菊池貞介)